

柳宣宏歌集

『丈六』

(砂子屋書房)

「丈六」とは結跏趺坐の意で、仏教の坐禅の際の最も基本的な座り方。

蟹が吹く泡のごときが坐禅する脳にあふれてくるのであつた

瑞泉寺の山より出でし真実は曲がりくねつた自然薯である

作者は長年に渡り坐禅に取り組んでおり、そのためか自己の内面の葛藤が作品に色濃く通底している。

リストラといふことなんだまつ黒な襟の罅を指もてたどる

むらさきが好きだつたなあ山の藤母見ることく沢のべに立つ

スリッパを履きて躓く階段の多き学校に明日より勤む

四十年勤めた学校を去り、母が死に、新しい勤務先での日々が始まる。六十代の難難辛苦は深く、重たい。けれど、平易な文体の引力によって、作品は独特のすずしさを纏っている。軽やかさのなかに一匙の生の真実。この悟りのような諧謔のような味わいは第一歌集から変わらない。十一年ぶりの第三歌集。

(小島 なお)

橋場悦子歌集

『静電気』

(本阿弥書店)

作者は一九八〇年生まれ。二〇一五年に「朔日短歌会」へ入会して以来の作品二九五首を収録した第一歌集。二十代のころは新聞に短歌を投稿していたという。

「開」ポタンしつぶと押す三十秒限りの孤独明け渡すべく
マニキュアが男のためでないことは男以外はみな知つてある

精神的に自立した女性像が浮かびあがる。また、職業詠に特色がある。

刑事より被疑者の署名の字のうまさ供述調書もまれにはありき

〈当職〉といふ主語による通知書に封をす切手の裏は舐めない

〈当職〉を一人称とする職種は限られる。これらは作者にしか詠めない歌であり、読者としては、もつともつと読みたい。

海底のやうな明るさ ひた走る電車に
天気雨降り注ぐ

日常の何気ない光景も、自然に柔らかく切り取る。さりげない眼差しが随所に満ちた歌集だ。いつか作者と会える気がしている。

(片岡 絢)

梶原さい子歌集

『ナラティブ』

(砂子屋書房)

第四歌集。あとがきには「ナラティブ」とは語り。からだか語る言葉です」とある。これまでも〈いのち〉を見つめてきた作者が、二〇一四年から二〇一八年までの鎮魂の日々を、言葉を紡ぐように詠む。

乳ふさの奥へと腹へと手を入れるあた
たかいあたたか死のからだなり
細やかな縫ひ目をたどる袖も裾もおく
みも祖母の針がくぐりぬ

実家である気仙沼市唐桑町の早馬神社にも津波が来たが、九十六歳だった祖母は波に漬かりながらも助かった。この祖母の百一歳の死に触れた時、作者の〈からだ〉にすうつと入ってきたのは祖母の〈からだ〉。

埋める手と握る手は同じ 同じ手が亡骸を埋めそして掘りにき

東日本大震災の後、多くの〈語り〉を聞き、その内容を想像の眼で見つ詠み示す歌には、常に痛みが伴う。

肉体のなかにわれらがあることを怪しみながら陽射し浴びをり

このような感覚の歌こそ、作者の〈からだ〉が語る言葉である。

(斉藤 梢)